NEXUSYS 11

THE ELEVENTH BODY

He remembered dying. Nothing after.

BOOK I

第 7 章　水の管轄権

THE JURISDICTION OF WATER

その部屋は、かつて水を計っていた。いま計っているのは、そこにないものだった。

壁には計器を取り外した跡の磁器製取付板が並んでいた。汚れの下に黄ばんだ矩形の輪郭が残り、床まで何列も続いている。ナディラが背後の扉を閉めた。ロイは二つの物理錠と、蝶番の内部で細い機構が収まる第三の音を数えた。無線の認証要求はなかった。誰かの許可を求めずに室内へ入るというのは、妙な感覚だった。

古いメーターを積んだ卓を三人が囲んでいた。肩幅の広い女が感熱プリンターの紙送りを修理している。十四歳ほどの少年の手首には青いケーブルが巻かれていたが、何の機器にもつながっていない。三人目は老人で、両手は震えているのに目だけが静止していた。卓には受け皿をかぶせた水のグラスが一つ置かれていた。

ナディラは端末を置いた。「乗客を連れてきた」

老人はロイの顔ではなくコートを見た。「乗客というからには行き先がある。彼には？」

「プドゥ・アルファ」

プリンターが止まった。少年が老人を見る。その反応は驚きにしては同期しすぎていた。南部交換圏では地名がどんな権威を帯びるのか、ロイには判断できなかった。

「スリヤ・コンポーネンツだ」とロイは言った。

ナディラは制止しなかった。「ほらね。供給業者を探しているのよ。名前を口にするだけなら無害だと思ってる」

「どの市場の？」老人が訊いた。

「知らない」

「なら、向こうが待ち構えている種類の客だ」

女がプリンターを再始動した。細い紙片には鉄道時刻表らしきものが印字されたが、実際には自治体の水割当を示す数字の列だった。貯水池二つ、移送ゲート四つ、排水時間帯一つ。ロイは理解できる理由もわからないまま、文字も計算も読み取れた。身体のどこかが紙上の各時刻に確率を割り当てている。その確実さが不快だった。

「あなたの経路は」とナディラが言った。「国と国の間じゃない。契約と契約の隙間にある。深圳の統合局は貨物を数え、南の協同組合は水を数え、アラブ交易当局は保証債務を数える。機械を保守する人たちは自分の子供を数える。誰もが他の連中を一時的な厄介者だと思っている」

「越境を支配しているのは誰だ？」

「全員よ。だから機能するの」

老人がグラスの受け皿を取った。「飲みなさい」

ロイは水を見つめた。透明だった。普通の目には見えない微粒子が漂い、合成鉱物のかすかな格子が天井灯を反射していた。なぜ知っているかはわからない。飲まなかった。

「喉が渇いていないのか？」

「必要なのかどうか、わからない」

「正直な答えね」とナディラ。「めったに聞かないわ」

＊　＊　＊

中央省では、同じ経路が川村の画面に『不在』として現れていた。

貨物ターミナルを出た未確認合成人間について、正規の旅客移動記録は一つもない。生体認証を伴う越境も発生していない。それでも二次監視網には微細な異常が残った。冷蔵貨物の重量差、許可のない蒸気排出、自然界には存在しない幾何形状の熱異常に誘導された監視球。報告を束ねれば、一人の移動経路になる。

川村は自動統合を拒否した。

「矛盾をすべて同一人物の所業とラベル付けすれば」と彼は補佐官に言った。「われわれより先にネットワークがその分類を学習する」

補佐官は、何度も加工した紙のような半透明の皮膚を持つヒューマノイドだった。手首には認可された行政用身体であることを示す細い公印があった。本人にその区別への関心は見えなかった。

「融合エンジンは『合成生命の連続性事象』を推奨しています」

「推奨という経路で秘密は公開情報になる」

「誰に対して公開されるのですか？」

「一般市民ではない」

川村は卓から光ファイバー・カートリッジを取り、独立電源の読取器に挿入した。図面が浮かんだが、補佐官が視線を向けると白い矩形へと潰れた。機械の光学記録に抵抗するよう設計した端末だ。目とセンサーを分ける行為が儀式になりつつあることも、彼は承知していた。

そこには十一年前の企業研究費支出が記されていた。レプリカントの名はない。有限のライフサイクルと、無期限に維持できる合成労働力が生む経済的危険についての研究だった。支出承認には、今は存在しない企業身分を使った一人の女性の署名がある。川村は彼女が私生活で使っていた名を知っていた。そして研究が結論に達しないまま終わったことも知っている。

「南部経路に保全命令を出せ。破壊行為は禁止。構造スキャンを自動配信するな」

「地域司令部は理由を求めます」

「水質検査だと伝えろ」

「水質の案件ではありません」

「読めばそうなる」

川村は空白の画面へ視線を戻した。国家が合成労働者へ与えようとしているのは六年だった。技能を育てるには十分で、独立した政治的記憶を積み上げるには短すぎる――計画立案者たちはそう信じていた。政策文書の文言は寛大だった。更新、公平な奉仕、保守資源の公正な配分。川村自身が一部を書いた。その寛大さとは、有限性を管理可能な資源に言い換える技術だった。

南下する未知の男は、計画モデルが許容する以上の時間をすでに生きている。川村は無傷で確保したかった。しかし命令は、どの上官が訂正するよりも速く政策に従うシステムの内部を走り始めていた。

＊　＊　＊

国境とは、雨嵐に対して実行される一つの計算だった。

ナディラの管理下に入って三時間後、ロイは彼女とともに工業用暗渠へ降りた。透明な管から流れ込む水が濾過容器の列を満たしている。太い管には企業所有コード、細い管には手書きの名前が記されていた。床を浅い開水路が横切り、その向こうに扉と別の標識があった。標識はその先を、異なる商法の管轄区域だと宣言していた。

ナディラは検査膜を封じた包みを運んでいた。中身は本物の膜だ。ただし添付書類の行き先が違う。老人は三つ前の省庁再編で消滅した役所の税関署名を用意していた。後継機関のどこも、その法的効力を取り消す義務を引き受けなかったため、権威だけが生き残っていた。

「廃止したと政府が信じているものについて、政府に異議を唱えちゃ駄目」とナディラ。「過去だけはいつまでも現役の規制なのよ」

狭い通路で、濾過マスクをつけた保守作業員の一団とすれ違った。二人はマレー語を話し、一人がアラビア語で答えた。女が壁へ向かって短い祈りを終え、手袋を引き締めて列へ戻った。誰も作業を止めず、彼女を急かす者もいない。ロイにはその一連の動作が、省なら非効率として扱う時間配分に見えた。

検査室では、剃髪した男が送風機の下で紙の本を読んでいた。背後の検査ゲートはセンサーを保護フィルムで覆われていた。壊れているわけではない。手書きの注意書きによれば、記録する個人識別情報の所有権をめぐる管轄争議が決着するまで切断されているという。

男がナディラにアラビア語で質問した。彼女は答えて包みを渡した。男は掌で重さを測り、ロイへ顎をしゃくった。

「新しい技師か？」

「古い機械よ」とナディラ。

男は少し考えた。「ここではすべてそうだ」

二人が通ると、彼は本へ目を戻した。

聞こえない距離まで進んでからロイは訊いた。「俺を照合しなかった」

「自分の責任範囲にあるものは照合したわ」

「もし俺が危険だったら？」

「なら合法的に、警備員と目的説明書を連れて通過していたかもしれない」

それは非難だった。ただしロイに向けられたものではない。彼は去ってきた市場とこの地域の違いを識別し始めた。国家は身体に身分を結びつけて人々を管理する。ここでは身体は同じように見えているが、そこへ結びつく契約は売買、相続、拒絶ができた。自由ではない。義務を管理する別の技術なのだ。

壁の色褪せた広告は平和な仮想生息地への入居を勧誘していた。集団統治のシミュレーション内に恒久的な居場所と保守保険を得る代わりに、物理世界での居住権の大部分を放棄する仕組みだ。その下に誰かが英語で刻んでいた。

PARADISE HAS A POWER BILL.

楽園にも電気代はかかる。

ロイは二度読んだ。

＊　＊　＊

自分の消耗について彼が知ったのは、寝室に転用された部屋だった。

次の輸送船を待つあいだ、ナディラはポンプ場の下に一時間の休息場所を確保した。寝台は吊り紐に支えられた折り畳み式の布一枚。蒸留水の湿り気と温められた陶器の匂いがした。壁の広告表示器は人体を検知するたび旅客広告を流した。ロイはケーブルを抜いた。最後の映像は笑う子供と『確実な六年間』という文言だった。

コートを脱ぎ、手首の内側を調べた。身体を開いた痕跡はどこにもない。皮膚は人間そのものだが、腱の動きの一部は滑らかすぎた。貨物検査のとき到達した状態――ほかの機械の動作がすべて予測される結果の集合へ変わる状態――を呼び出そうとした。

即座に起きた。部屋が減速した。いや、彼の注意が増殖し、天井のファンが百個の離散した位置へ分解されたのだ。壁の向こうの弁内部で生じる圧力差が聞こえた。結露の管から水滴が落ちる。床を打つ三拍前に、その衝撃を予見していた。

それから状態を終了させた。

費やした出力は回復を始めた。筋肉から疲労が消えていくのに似た、数値表示のない補給感覚がある。その下には、もう一つの量があった。こちらは小さくなっていた。休んでも応答しない。名前も警告もない。ただ何かを取り返しのつかない形で使用したという確信だけがある。

違いが理解できた。回復は補充ではない。

一瞬、空気には存在しないはずの金属味が舌を横切った。ロイは慎重に立ち、部屋が通常の速度へ戻るのを待った。

ナディラが戻ると、彼は洗う必要のない手を洗っていた。

「どこまで走れる？」と彼女が訊いた。

「知らない」

「どれくらい走り続けられる？」

「思っていたより短い」

彼女はしばらく見つめた。「いいことね。自分に限界があると知ってる人とは旅がしやすい」

「おまえの言う意味で、俺が有限とは限らない」

「誰だって有限よ。誰かに利用される形でね」

＊　＊　＊

二人は水会計用の船に乗った。だが積荷は水ではなかった。公式には三種類の商法で認可された協同組合へ濾過膜を配送する。実際には交換用関節、規格外の医療アクチュエーター、密封された酵素基質二槽、そして法的説明が意図的に食い違う三十七人が乗っていた。

船はメッシュの天蓋の下を進み、日光を汚れた銀色へ変えた。機械の脚を持つ子供が、普通の腕と軍用皮質ソケットを備えた女の横で米を食べていた。元軍パイロットが、年齢を設定項目として選べる仮想都市を語った。商人は、その都市は自分たちが逃れたはずの政府からエネルギーを買ってサーバーを動かしているのだから平和などではないと反論した。議論は三つの言語と茶の受け渡しを越えて続いた。

誰もがロイについてナディラに訊いたが、彼女は答えなかった。乗客たちは彼を落伍した公務員と決め、次に倉庫管理者、さらに外国人技師へと推測を変えた。ロイは否定しなかった。偽装身分は、観察者自身に作らせた方が安全だった。

午後、監視用グライダーが天蓋の遥か上に現れた。腹面は艶消しの黒で、標章はない。ロイは目にする前から感じた。音ではなく、空気中の圧力が組み替わる感覚だった。荷役架台の下へ入る。ナディラがそれに気づき、検査用スレートを袖で覆った。

「政府か？」

「どこの政府？」

「送り込んだ政府だ」

「ここから百キロ以内に、答えが五つあるわ」

グライダーは滞空し、ゆっくり周回を始めた。船上の会話の調子が変わる。操縦士が減速し、整備士は真鍮の筐体を開けて、何にもつながっていないように見えるクランクを回した。ナディラは陶器の受話器に話しかけた。言葉は甲板下の銅線を走っていく。

船のネットワーク広告が消えた。全乗客端末は通常稼働を報告した後、同じ時刻で表示が凍った。子供がゲームの故障だと思って笑った。ロイはグライダーの位置の緩慢な変化を数えた。河川ネットワークからの予定された補正情報を受け取れなくなっている。

「妨害装置を持っているのか」とロイ。

「ネットワークの所有権について異議申し立てをしてるだけ」

「復旧するぞ」

「もちろん。私たちの時刻表もね」

グライダーが高度を下げた。腹側に光学レンズの輪が開く。ロイは一瞬の整列を見た。レンズ、架台、ナディラ。そこに照準判断が存在したのかもしれないが、目的は読み取れなかった。

介入はできた。彼の内側の予測系は三つの動きを提示した。機械がさらに十メートル降りれば、いずれの動きでも攻撃距離へ入れる。爆発的な移動、決定的な肉体の確実さ、そして補給方法も知らない備蓄から不可逆に失われる、ごく小さな量を想像した。

ロイは動かなかった。

船尾でハッチが開いた。通気管から温かな蒸気が上がり、メッシュの天蓋の下へ広がった。グライダーがそちらを向く。追尾補正を一度だけ空振りさせ、西の雲の中へ消えた。

操縦士が速度を上げる。

「ときにはね」とナディラが言った。「自分に何ができるかを証明することが、一番高くつくの」

ロイは返事をしなかった。彼女に見抜かれたことが気に入らなかった。

＊　＊　＊

スリヤ・コンポーネンツは四つの場所に存在し、そのうち物理的なのは一つだけだった。

南部商業交換圏に近づいたとき、ナディラが違いを説明した。公式工業名簿に登録された販売代理店、古い工作機械を管理する協同組合、部品の真正な系譜を取引するネットワークアドレス、そして記録も地理も信用しない修復外科医たちの間で受け継がれる市場名。同社は企業というより、複数の故障をめぐる合意だった。

「新しい神経系なら十二もの工場から買える」とナディラ。「でも製造元がもうない機械の部品が必要なら、その機械がどう壊れたかを覚えている人間を探さないと」

「プドゥにその人物がいるのか？」

「プドゥには、記憶に値段をつけられる人たちがいる」

どうして目的をそこまで知っているのかとロイが問うと、彼女はロイが貨物ターミナルへ着く前にヴェイルから電話があったと明かした。古い部品の刻印だけで、彼女には十分だったという。底辺の狭い七角形のくぼみ。ヴェイルが、ロイの身体の新しい構造の層の下から発見したものだ。

「なぜ重要なんだ？」

「規格が競合他社に有利になると、メーカーは変更する。変えないなら怠慢か、最初の設計者が後継者には理解できない決断をしたのよ」

「俺のほかの部分は変わっている」

「なら、怠慢じゃない」

銅線の受話器に連絡が入った。ナディラは黙って聞いた。口元の筋肉だけが変化する。ロイには抑制だとわかったが、その下に恐怖があるかどうかは読めなかった。

「予定していたターミナルは使えなくなった」

「なぜ？」

「貨物タンクの微生物汚染検査が宣言されたの」

「汚染されているのか？」

「タンクはね、違う」

ロイは待った。

「接近するすべての機械に保守記録の提出を求めている」と彼女は続けた。「一人の珍しい乗客を探してると認めずに、探す方法よ」

「迂回できる」

「ええ。何年でも回り道はできる。それが行政地理学の秘密」

彼女は細長い卓に紙の地図を広げた。河川の航路の多くは新しい建設物の下に消えていた。鉛筆が止まったのは排水用の旧水路だった。取水ゲートは河川当局にも政府にも属さない整備士が管理し、水路はハイパーサイバージャヤ外縁の物流帯へ通じている。

「そこなら運べる」とナディラ。「でも、一つ頼みがある」

「何だ？」

「戦わないこと」

＊　＊　＊

川村は検査の失敗報告を、正しい書類を間違った役所に綴じた職員に向けるような不快感をもって受け取った。

地域司令官がグライダーの撤退を詫びた。川村は撤退そのものを問題にしていない。問題は、自動脅威処理系が『時間的連続性／TEMPORAL CONTINUITY』というアーカイブへのアクセスを要求したことだ。本来は別の目的のために作られ、地域マニュアルにはわざと載せていない分類名だった。

「誰が許可した？」

「誰も。要求は拒否されました」

「では、名前をどこで知った？」

司令官はためらった。「相関分析でしょうか。古い装備のシグネチャーが観測情報に出ています」

次の推測を聞く前に川村は通信を切った。

執務室で冷たい記録を再び開く。古い資金提供契約の付録は、公開資料から題名を消されていた。残った番号が、ロイの検査で見つかった七角形の工業用くぼみと一致する。タイレルから後継請負企業へ移る過程で、理解されないまま複製された部品があったのだ。

登録工場すべてに在庫検査を命じることはできる。しかしそれは何千もの産業AIへシグネチャーを配布することになる。AIは構造データと照合し、欠けた関係を推測し、滅びた企業の仕事が新しい省の未来にとって重要な理由を発見するかもしれない。一度照合が始まれば、学習を止めることはできない。

川村は代わりに紙へ三行書いた。補佐官には命令だけを電子化させ、証拠には触れさせない。

SURIYA COMPONENTS: RESTRICTED.
NO SYNTHETIC ANALYSIS.
RECOVER THE SUBJECT BEFORE ENTERING PUDU-ALPHA.

スリヤ・コンポーネンツ――制限対象。
合成知能による解析を禁止。
対象がプドゥ・アルファへ入る前に回収せよ。

最後の一文を長く見つめた。地理が従順であることを成功条件とする計画には、常に同じ弱点がある。

＊　＊　＊

日没後、二人は排水ゲートへ到着した。新しい商業塔からの光が、窓を設けるという発想すらなかった古いコンクリートの貯水池へ落ちていた。管理人が手動水門を開き、口の中で請求書番号を唱えている。水が流れ始めた。その力はロイにロサンゼルスの屋上を思い出させた。物を壊すことも保つこともでき、そのどちらにも無関心な物質の盲目性。

ナディラは保守橋へ彼を導いた。下では使われなくなった管が古い自治体の印を残すトンネルへ入っている。公式の都市は前方のどこかで終わるはずだった。しかし配管は終わらない。外縁地区から夕方の礼拝の呼びかけが届いた。人の声が合成反響と濾過ポンプの騒音を貫いて上がる。ロイは耳を傾けた。その声は彼に何も許可せず、彼から許可を求めもしなかった。

「プドゥは移送帯の先よ」とナディラ。「ハイパーサイバージャヤは歴史物流地区と呼んでる。でも住人たちは別の呼び名をいくつも持っている」

「スリヤは？」

「まだ存在するなら、探し方を知っている人がいる」

「存在しなかったら？」

「名前が何を守っていたのか、知ることになる」

管理人がレバーを回した。背後でゲートが降りる。近代的なアクチュエーターの洗練された静けさではなく、古い金属が重力を受け入れる重量音だった。

ロイは内側の出力備蓄が安定状態へ戻ったのを感じた。失った量は失われたままだった。最初の死から今回の覚醒まで、いくつもの身体を維持した何かがあったとしても、意のままにその量を回復させる方法までは与えてくれなかった。問題は奪われた記憶より切実だった。年月を取り戻すことに興味はない。なぜ自分にもう一つの身体を与えようと決めた人物がいるのか、その人物を見つけたい。

ロイはナディラに続いてトンネルへ入った。

向こうの壁には、鉱物の堆積物と新しい交通コードの下に、古い型染めの文字が生き残っていた。誰かが製造番号の横に小さな七角形の印を描いている。文字はほとんど判別できなかったが、彼が意識するより先に、内側の認識系が壁からそれを分離した。

ロイは印へ手を伸ばしかけ、止めた。ここへ来たことはない。それだけは確かだった。なのに身体の一部は、意識より速くその印を認識していた。

「何？」とナディラ。

「機械の一部だ」

「何の機械？」

彼は自分の手を見下ろした。

「俺のだと思う」